



碧 びい
空 こん
尽 じん

中国短編小説集 三
七

春秋華菊々

龍の鬘 刊行々

お題目

お題目 註…括弧内は時代とジャンルです

そ 祖と、 こ 故と（民国期・歴史）	…………… 2
情に溺るるを知れば（明代・武侠）	……………22
ミニコラム 三国志が日本で人気な理由	……………21
政治と文学は切り離せない？	……………77
あとがき	……………78

祖と、故と

祖と、故と

一、1936年

その日、^{ベイピン}北平の^{ジョンナンハイ}中南海公園の広場は美しい花の香りをもかき消すほどに、重苦しい空気で包まれていた。

何十人もの学生達が一カ所にかたまり、激しい論争を繰り広げていたのだ。たまたま友人の^{フォン}風に連れられてそこを通りかかった私は、それが抗日を訴えるためのオリエンテーションだということを知った。

このオリエンテーションの主催は軍部の抗日工作員の間だ。端的に言うと、こうした催しは北方の満州国建国後、中国本土に深く爪を突き立てている日本に対し、中国人全員の危機意識を高めるために行われているのだった。

私の隣を歩いていた風は、この光景を見るなりため息をついた。

「こりゃ、気楽に散歩させてくれるような空気じゃ無いなあ」

紫禁城の西に位置する中南海は、古くから皇帝ら一部の人間にのみ立ち入ることを許された場所だった。いくつもの離宮や庭園はかつて皇帝を始めとした高位の人々の避暑地として使われた。清朝が滅び中華民国となってからは政府の要人達が政務をする場所だったが、その政府が十年も前に^{ナンジン}南京に遷都して以来、中南海は一般の人々に公園として開放されたのだった。

「仕方ないさ。時代が時代なんだよ」私はそう答えた。

「若いってのは、いいなあ。国のことなんてよくもまあ考えていられるもんだ」

「風さんは家庭という国を治めるので大変だろうからね」

軽口を叩くと、風もハッハと笑った。それから私は、学生達に視線を戻した。

彼らは今まさに「満州を占領している日本軍が万里の長城を越えて北京へ侵攻したら、我々はどうか」という議題について論争していたのだった。

愛国心ある中国人なら、いやたとえそうでなかったとしても、日に日に国土が侵されていくのを黙っている者はいない。誰もが立派な意見を述べた。日本軍の城壁の中への進入は断固として阻止する、死ぬまで戦う、銃弾が尽きても生身の体でぶつかって相手を倒す……。心の底に秘めた思いは、誰もが同じだ。

やがて、発言の順番がとある女学生までまわってきた。見たところ十四、五歳、色白で、顔立ちは上品さと愛らしさを併せ持っていた。彼女の周りには同級生らしい他の女の子もいたが、おかげでその美しさが殊更に際立って見える。

周囲の人々がそうだったように、彼女もまた日本に断固立ち向かう発言をするものと思われた。

ところが、彼女は第一声にこんなことを言い放った。

「私は、北京の城壁に立ちます」

その発言に眉をひそめたのは、決して私だけではなかっただろう。隣の風もそうだったし、学生達もそうだった。

討論会の司会者をしていた男が、訝しげに彼女へ問い返した。

「城壁の上に立つと言ったけれど、それはどういう意味？」

女の子は一瞬答えに窮したようだったが、やがてしっかりと目を据えてはきはきと答えた。

「外から攻めてくる日本人と、中から国を守る中国人の間に立つという意味です」

「立つだけ？」

「はい」

女の子には、彼女なりに何かしっかりと芯の通った道理があるようだった。言葉にも態度にも迷いは感じられなかった。

その場にいた数十人余りの人々は、ひそやかに言葉を交わした。

——何にもせず城壁の真ん中に立ったところで、敵に撃たれるだけじゃないか。

——そんなことを言ったって、若い娘だ。武器を持って戦うことなんか出来やしない。

——ということは、日本が侵攻してきたら彼女は城壁に立って中国の盾になるというのだろうか……。

女の子の発言は、戦わないという一点を除けば、別段愛国心に欠けているわけでもなかった。武器を取るだけが国への忠誠を示すしるしではない。ましてこの場の人間は殆ど学生で、口では戦うと言っても、それが実行に移せるかは全く別次元の話だ。軍に身を投じるにしても、少し頭の良い者であれば、国の中枢である政府がもう何十年もまとまりを欠いていることはわかっていた。彼女が銃を持った軍隊の前に身を盾として立ちただかるのも、尊い自己犠牲の精神の表れと考えれば差し支えはないだろう。

女の子の発言の根本にあるものが何なのかははっきりしなかったものの、人々はその意見を肯定的に捉えて自分達を納得させ——もしかすると、その女学生の清純そうな美しさも原因の一つだったかも知れない——、それ以上の言及はしなかった。それからの発言はまた過激なものに戻り、空気も荘厳なものへと変わった。

私だけはまだ、その女の子の発言のことを考えていた。しきりに日本人との徹底抗戦を叫ぶ学生達の中、彼女の言葉にほっとするものを感じずにはいられなかった。

私にとって中国は故国であり、祖国ではないのだ。

情に溺るるを知れば

情に溺るるを知れば

女はもう幾晩も眠れなかった。言いしれぬ興奮が体中を走り抜けていた。不意に体を起こすと、絹の布団をぎゅっと掴みながら震える声を漏らした。

「帰ってきた……あの人が帰ってきた……！」

形容出来ないほどの安堵が体中を満たす。彼女はこうべを上げ、すらりとした手で窓を押し開き、夜空を眺めた。

「いつ来るの？ 私のところに、いつ来るの？」

まどかな月へ問いかけたが、答えは無かった。

しゆのう
朱濃 は、鼻から漏れる己の暖かい息遣いを感じた。

これが生の証だ。まだ死んではいない。彼は壁に身をもたれ、目を閉じた。

暗い母屋の中にはもともと、彼を含めて八人の男がいた。だが、息をしているのは今や朱濃ただ一人だった。

手中の剣が浴びた血も、乾き始めている。刃は暗闇の中でぎらつき、再び潤うのを待っているかのようだった。

だがその剣を握っている彼の手は、もはやこれまでに見えた。鮮血の流れ出た右肩は動かなくなり、もう自分の体から切り離されてしまったかのようだ。

戸口に、細い人影がすっと現れた。

「若様、ここにいらっしゃるのですか？」

声と共に入ってきたのは、侍女のしょうえい小嬰 だった。朱濃の肩口がぼっくり裂けているのを見るなり顔色を変え、彼女はすぐさま駆け寄って薬を用意し、塗り始めた。

母屋に射す微かな月光が、女の顔を照らす。二つの瞳は落ちくぼみ、眉も力無く垂れている。まだ二十歳そこそこながら、髪には白いものが混じり始めている。

この女の苦労を思うと、朱濃は胸の内が熱くなった。

彼のわがまま、彼の選んだ道、彼の苦難に、小嬰はもう六年もつき合ってきた。

小嬰は薬を塗りたいうちに、はっと青ざめた。朱濃の腕の異変に気がついたのだ。筋が絶たれてしまっていることに。

侍女の肩は小刻みに震え、瞳に涙の粒が浮かび上がった。

「若様。若様の右腕が……」

「いいのだ。生きていただけ、ありがたい」

女はかぶりを振ると、唇を噛みしめた。

「若様の苦労を、あのお方がほんの僅かにでもわかってくださったなら……」

「わかって貰うほどのことではない。お前も、俺のために泣くようなことはするな」

小嬰はうなだれた。ややあって涙をおさめ、懐から紙にくるまれた饅頭を出し、両手で捧げ持って朱濃に渡した。

二人は黙って饅頭を食べた。周囲の死体から立ち上る血の臭いも気にならなかった。そういう場所にいること自体、慣れてしまっていたのだ。

朱濃は黙々と饅頭を食べ続けたが、小嬰の方は二口ばかりつけたところで手を止め、恨み言を吐くように呟いた。

「もう六年になるのですよ……。あの方だって、とうに若様の心遣いを気がついておりましょうに」

「そうだとすると、俺は合わせる顔がない」

「では……いつ、おやめになりますの？」

「わからん。右は駄目になったが、まだ左の手はある。両の足もある。目も見える。まだまだ続きそうな気がするが、明日終わるような気もする。俺にもわからん」

朱濃は、うなだれている小嬰をじっと見つめた。

——もう、俺にはついてくるな。こんな無駄な苦労はするな。

同じ台詞を、彼は幾度この侍女に向かって告げたことか。だが彼女の決意は一日たりとも揺るがなかった。命のある限り、彼に

ついていくと決めているのだ。だから今では、口にすることすらも無駄に思えた。

小嬰は残りの饅頭を食べ終えると、母屋に転がっているむくろの懐をあらためた。白樫の大棍棒を持った巨漢を見て、彼女は目の色を変えた。

「まさか さんとうそうしゅう たつじん こういつめい 山東曹州 の 達人、黄逸命……？」

「そうだ。黄逸命以外に、その大棍棒を使う者はいない」

「こんな大物まで、あの方を狙っているだなんて」

大物はその男だけでは無かった。朱濃の知る限り、今晚の七人はいずれもとみに腕が立った。この六年でも今日ほど死力を尽くした戦いは無く、失ったのが右腕だけで済んだのもむしろ暁光と言える。

これだけの達人が顔を揃えてここ はくえんちん 白煙 鎮 にやってきたのは、何か理由があるに違いない。朱濃は嫌な予感がした。

小嬰は死体を眺めてしばし黙り込んでいたが、ふと何かを決意したかのように、重々しく口を開いた。

「若様。さしでがましいかもしれませんが、今後またこのようなことがあれば、いよいよお命にかかわります。あの方のために陰ながら戦うのを留め立てはいたしません。ただ……これからは誰かの力を借りるべきではありませんか。目的のためを思えば、他人の助力が何の差し支えになりましょう？ 若様のやっていることは、世間に恥じることとて一つも無いではございませんか。どうか……どうかお聞き届けくださいませ。私は、若様が心配でならぬのです」

いつになく真摯な言葉に、普段は決意の堅い朱濃の心も揺れた。六年前のあの日から、この戦いは一人でけりをつけると決めていた。だが侍女の心遣いは、無下にしかねる。

月日と疲れは、どんな決意をも揺るがせるものだ。朱濃とて決して例外ではなかった。まして今の彼は、何よりも頼りにしてきた右腕を失ったのだ。六年間、この右腕があったから戦い抜けた。小嬰もそれがわかっているのだろう。多少なりとも反駁してみようかと思ったが、それらしい言葉も見つからない。

とうとう心は折れた。彼は呟くように言った。

「俺を助けたいという輩が、いればいいが」

小嬰の顔が、ぱっと笑みをのぞかせた。

「私、必ず探してまいりますわ」

それは朱濃が久方ぶりに見た、彼女の笑顔だった。